

万葉集と水



よしむら かずなり
吉村 和就

グローバルユニバーシティ代表
国連テクニカルアドバイザー
水の安全保障戦略機構技術普及委員長
日本水フォーラム理事

新しい元号「令和」は国書である万葉集から引用された。四月一日公表の新元号「令和」について多くの感想や意見が述べられたが、特に万葉集に深い関心が寄せられ、久しぶりに出版界、書店がにぎわっている。万葉集は奈良時代（西暦七一〇年から西暦七九四年）の後期から平安時代にかけて編纂された日本最古の和歌集である。大友家持らが代表的な歌人であるが、当時の皇族、貴族、官僚だけではなく、広く農民の歌もあり、詠み人の豊かな人間性や心の動きを素材に、また率直に表現した歌が多いことは良く知られている。筆者も万葉集のブームに誘われて万葉歌人により詠われた「水にまつわる歌」を探ってみた。日本人がいかに「水」を崇め、水と交わり、水を大事にしてきた歴史を再認識できるであろう。

一・万葉集とは

現存する日本最古の歌集で二十巻からなる。全巻の完成は八世紀末ごろで、大友家持が編纂に関係したことは確実とされる。総歌数は約四千五百、うち短歌四千二百余首と長歌約二百六十首が主体をなし、他に旋頭歌（せどうか）六十余首、仏足石歌がある。主要な作家としては、壬申の乱（西暦六七二年）までの第一期に有馬（ありま）皇子、額田（ぬかた）王、奈良遷都（西暦七一〇年）までの第二期に柿本人麻呂が活躍し、奈良時代前半の第三期に山上憶良、山部赤人、大伴旅人、高橋虫麻呂、奈良時代後半の第四期に大伴家持、大伴坂上郎女などがある。日本最古の和歌集として、口承段階から文字使用による表現への移行という歴史的な条件を反映して、日本における文学の誕生を告知し、以後の日本文化の水源をなすとともに、万葉仮名による表記法が国語学上きわめて重要な資料となっている。

（参考引用…百科事典マイペディア）

二・万葉集に歌われた「自然観」

新元号「令和」は宴席の即興歌からの引用であったが、初期の万葉歌は古代からの自然観や靈魂観を背景とする歌が多く、これは、山や川、大木などの自然に靈性

を認め、それを畏怖（いふ）しつつ、それに依存し自然と融和し暮らしてゆく人々の心を詠み、言い換えれば日本の風土と農業生活に根ざした必然的な心の動きであったと推測されている。そうした自然感情と水とのふれあいが、もつとも強く表されているが初期の万葉歌である。

一 川の万葉集

川を詠んだ歌は「万葉集」に数多く見つけることができる。特に大和川にまつわる歌を拾い上げると、ゆうに百首を超える。以下は大和の川を詠い、その川の近くに万葉歌碑が建てられているものにスポットを当ててみた。

【佐保川】 さぼがわ…奈良市・大和郡山市を流れる一級河川
 ・佐保川の 清き川原に鳴く千鳥 蛙と二つ 忘れかねつも（巻七―一―二三）

【卷向川】 まきむくがわ…桜井市を流れ大和川に注ぐ

・痛足川 川波立ちぬ 卷目の 由槻が嶽に 雲居立てるらし（巻七―一〇八七）
 ・あしひきの 山川の瀬の 響るなへに 弓月が嶽に 雲立ち渡る（巻七―一〇八八）
 ・ぬばたまの 夜さり来れば 卷向の川音高しも 嵐かも疾き（巻七―一一〇一）
 ・卷向の 山辺とよみて 行く水の 水沫のごとし 世のひとわれは（巻七―一二六九）

柿本人麻呂が詠んだこの歌の意味は、「卷向山の ほとりを響かせて 流れゆく水の水沫のようなものだ。生きてある身のわれは。」とまさに、はかない人生を詠いあげている。

【初瀬川】 はせがわ…大和川の上流部の支流

・人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川渡る（巻二―一一一六）
 ・石走り 激ち流るる 泊瀬川 絶ゆることなく またも来て見む（巻六―九九二）
 ・泊瀬川 速み早瀬を 掬ひ上げて 飽かずや妹と 問ひし君はも（巻二―一二七〇六）

この句は詠み人知らずだが、早瀬の水をすくい上げて「飽くことがないか、妻よ」と言問いをしたあなたよ。と飽くなき夫婦愛を詠っている。

【飛鳥川】 あすががわ…大和川の支流

・明日香川 しがらみ渡し 塞かませば 流るる水も のどにかあらまし（巻二―一九七）
 ・明日香川 七瀬の淀に 住む鳥も 心あれこそ 波立てざらめ（巻七―一三五六）
 ・明日香川 瀬瀬の珠藻の うち靡き 情けは妹に 寄りにけるかも（巻一―三二二六七）

詠み人知らずだが、飛鳥川の瀬瀬の玉藻が打ちなびき流れるように、心は妻に

寄ってしまったことよ。と詠いあげている。

【多摩川】 たまがわ・山梨、東京、神奈川を流れ東京湾に注ぐ一級河川
珍しく東歌（あずまうた）の中に首都圏の多摩川が詠われている。

・多摩川に、さらす手作り、さらさらに、なにぞこの児の、ここだ愛しき

この句の意味は、「多摩川に手作りの布をさらすと、流れはさらさら、いままら言うまでもないが、この児が、とてもかわいいのです。」と子への愛を詠っている。

（奈良県公式ホームページ 川の方葉集より 部分引用）

二）泉・清水の方葉集

万葉集では、やはり水に関する地名や表現が多く見られる。特に泉が数多くみられるが、「水が豊かな場所」や地名として多く用いられている。

・水こそば とこしえにあらめ 御井のま清水（巻一―五二）

・落ちたぎつ 走井水の 清くあれば 置きては我は 行きかてぬかも（巻七―一二七）

・家人に恋ひ過ぎめやも かはず鳴く 泉の里に 年の経ぬれば（巻四―六九六）

この句の意味は、ここ蛙の鳴く美しい泉の里に、仕事で赴任してきたが、予想

外に長逗留になり、いつ帰れるか判らない。家に残してきた家族への恋しさが募るばかりの日々早く帰りたいと詠っている。

・馬酔木なす 栄えし 君が堀りし井の 石井の水は 飲めども飽かぬかも（巻七―一二八）

この句も素晴らしい。奈良時代は裕福な人でなければ、石で囲った井戸は作れなかった。その井戸を惜しげもなく人々に開放し、命の水を人々に無償提供している。その姿は後々まで多くの人々に慕われている亡き先人の偉業を讃えている歌である。

あとがき

万葉集には四千五百首余の和歌が詠われている。数多く編纂された奈良時代、特に天平時代は決して良い時代ではなかった。度重なる政変と飢饉は人々の生活を苦しめ、さらに疫病が蔓延し多くの死者が出た。

さらに多くの地震が大和の国を襲った時代でもあった。しかし万葉歌人は、自然を崇め、周りの人々に愛をささげ、力強く生きてきた歴史を歌いあげている。万葉集から引用された新元号「令和」のもとに、歴史を大事にし、新たな日本の姿が築きあげられることを望んでいる。